處女七種

繼色艷聚

へ13
3227
2

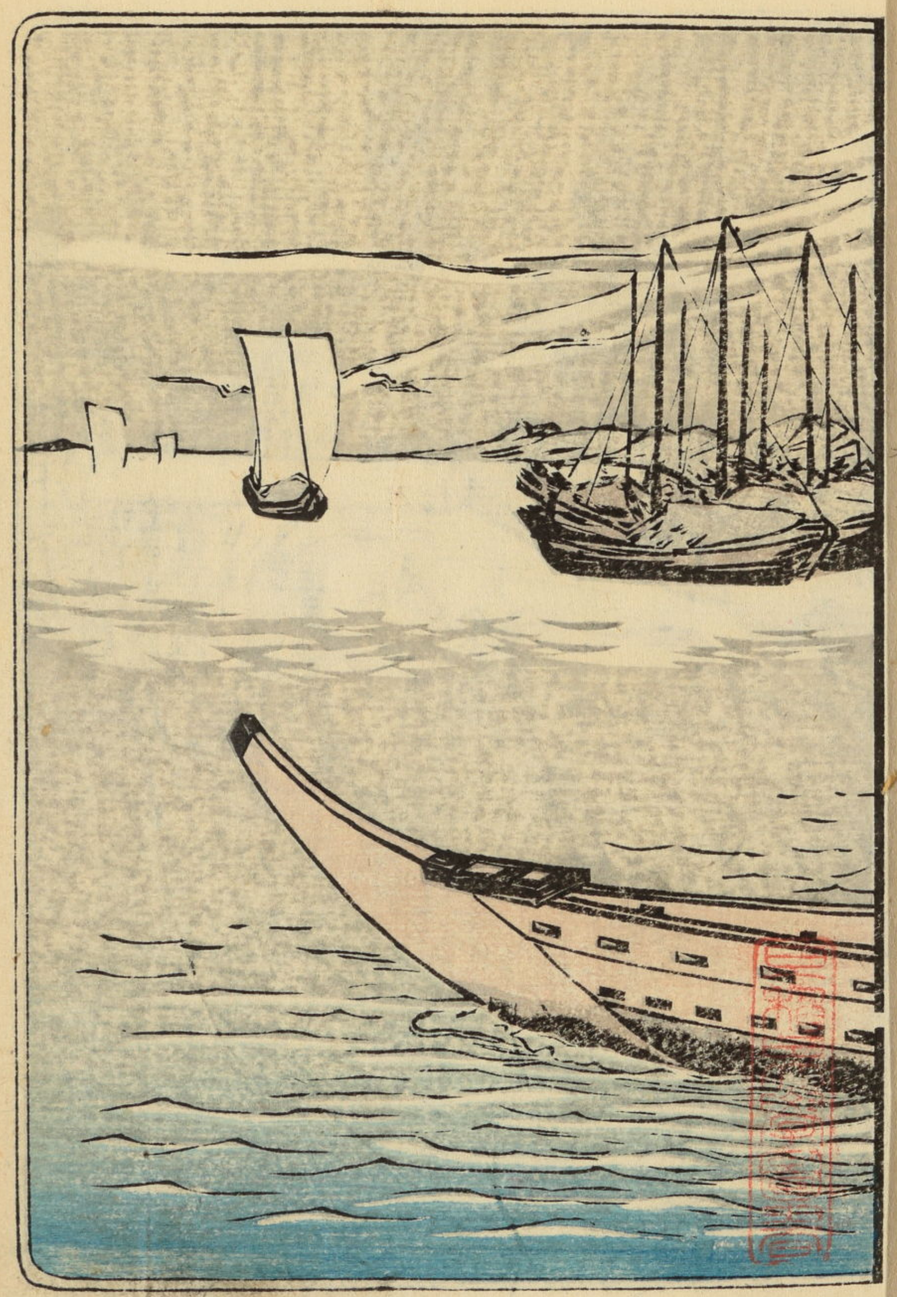
へ13
3227
2

夢殿そと拾遺

昭和九年

昭和十年
七月四日

浦ちどり
思ひ個の
胸さわぎ
永春友
娼女
お春



我宮は
旅のはての
長縄を
あきてふ
もの
あるふなれ
雲州の
漁夫

松花

秋色艶麗處女七種三編上之巻

江戸

爲永春水編次

第十三章

愛ハ於花ハ月ハ鷲鷲鞍どもハ討ち立て粉支をまるとそ
一点不和りゝして道ハ波ゝ支ぞと知をあやまるも
らぬ元旅路ハ日中ハそも傳ハ連立人ゆけれハ伊とるく
氣味ゝ清らくも男ハ多ゝ歩道ハかゝて親ゝも
稀ハ勝ゝ我ゝ西東笠ハ鷲鞍とも油断ハるまい

連れ放さじと伐僕は路を猶して他所へ行躍るるなど
ちきんと世べ伺とるーてら退るべをと家ど弓て物いて獨り
戦慄とある人けく 花「アノウ渡の人の伺根しくろふれ人金ぐど
渡れさ指ぐま 挑燈も見えるくるさぢやアるひ久は苦労
ちぐらは 待て見てお呉る 「ナアニ此道へ曲アくれらと渡ぐ
ちら一町ら半町あるくと茶屋ぐ見人るくりやしかー待て
居ると思ふ 追付まに 花「まだ根ちうどぞ待て居てお呉
伺根も私の氣でい大そうよ数十町渡れと指ぐらら「ナニサ

お家ぐ伐成ナ 追付来やまそして先途の泊の財刻ぐ
遅くるると泊て呉や せん誰でも一人アア宿へ着て居れべ
渡ちら行さめも泊まるとけん宿へいそぐ方ぐ
冨ぐざぬまにトりよう早く端肩入れて頭くふ欠出を
ぐど 花「コレサ子 待て
アレ術ちひョお茶遣の費祈も苦しーるひで身猶豊言と
お男ひぐらふぐ子 重根ふ逃てお呉ぐと便中ぐ閉て苦しい
ちらまモウ 此と あるうふ 歩けてお
呉る 「ハイ ソラ肩休ぐぞ

いくら「ヲット」兼和「モウおゝ」後ゆきて上るナ工へ梅組
大概よりらんぢやア　ねへ「フム」左様ウナ　モウ冒らくくト
伺う異しき原語悪き奸計をするのくるぶ材工へ粧更ゆ
也　宴もじるこしも女の情後ゆ有る意即ち身も組義の
ヒ　ヲ　ゴ　出来て如形ゆ変ひのゝ義も後ゝ来られ変ひ
様ゝもあるし紫ゝ伺の様して長妻へ注れゆ所ゝ
細くも出しくゝり芝居の中より顔をさゝ出し後の方せ
ゝりゝくゝ様向て演舞ばく　花「マア伺の様して山様ゆ逆ひ

真さらうねえ宮ゆモウ気ガ岡てゝうるひヨ伺の卒濃生ぶゝう
此辺で泊て居てお呉ナ。工駕籠ゝんドウ引ぞお頼ぶゝう左
様してお呉ナ　「ハイく左様ゝモウ山三先路へ注て体ゝ世ゝう
ト言義ゝうまさるゝゆ形て一所の宿ゆさしゝるそも山所の
分野へ駆下ゆ看下しゝる青海原言波山の如くゆ逆言て
幾丈とうそくもるゝうね巌石の岸を洗ひ物後ゝさゝ筆ゆ
尽ぶ月いあれども職まそ半面黒白の分る白原闇より自様
帰しく思ひ出汝のさゝ引を手の物ゆ引ゝ並ぶて此所ぞと好の

駕籠屏風息杖をして顔を見合せ合点あるべう後樽ゞ
「サア此内室さん此所で待合せやうぞ左様久者
ぞうよ」「ヲヤよくへ出ておの氣色ぐも法覽しろ仏と狂乱をて
お主人申せうと言を受つて駕籠の中後ゆうく出るお花い溜息
花「私まハ乱気が強う悪ひうモウ〳〵怖ろしいて堪られ別ヨ仏ざう
怖ろしく思ひます」「欲ざうう見へ難申せうゞ昼中見さんてゐ
女ア減法強乱気をておぞゐ申花「左様久そして此所ハマア
何とりへ思ざわ人「そ此所うち子おゝ名ホしゝ薩埵峠と

りゝ所サト聞てお花ハ乱ふうる所の名さへ辻占の会さと
りゝハ何のぞ吾妻の前尾ハるど申らん万一不逢ホ戻さる
う左もるきるるゞ憂旅も百里ホ命る屋中を怖れ乱もるく
臨出せ一生強情義ぐる一応重と推量世ハ大強表と
生涯を尽されもする者ゞせうと名高る宮ドハ女の情薩
埵と名付一峠あそ最も難所紀高根うう
抑駿河国宇渡郡奥津頭薩埵嶺岩城山のふもと
みそむう地蔵菩薩の石の像を出現させやうる霊地

さくらさく
薩埵峠ゑ
おはな
お花
越方
行きゑと
思ひゑむ

なう地蔵菩薩の出現の示唆菩薩峠とは陸奥のいせ
けう又薩埵といふ字は薩埵と縁。薩の字は薩るとふ
ド　ド　ド
字なり　埵の字は流出ふ　縁ゝを埵るとふとふ字なりされば
ド
此峠より　堀出し中なる石の地蔵菩薩埵は峠の素の義
西倉沢の渡より八町ばかり程の村東勝院といふ寺ふ在
きて西堂検あることなりと云信ある人多し　然ればいれど世俗
のあれを知る事稀なる由菩薩埵を難別の様ふ誤へる
なり　なほ　それを奈何といふに峠の前後の小名ふも多く

男女の身の上ふ思ひ寄る名を付くあり。女丈坂。男丈
坂。此の神平。ふくろ坂。平野の上高ふ小野の女房ぬ
と女丈ふの神と異名なる諸あれば薩埵を大ぶと伝ふも
その由なきに成るべきなり。九理ふ此峠より海を見て泳ぐ者の
鮑とる女房を浮んん裏乃海
再説お元い加ふ紙を出て乳ふ成る思ひ出く今年一
昨の後の方のゝ見やりて孝助の来るを待ふ者モウ
挑燈ぶ見人ふ成るあざれ人裏も途中で孝助でも殺りへ

丙午ひとと男ふヨ何ごろ猫ガドキ〳〵をるわど分相〳〵てるら
ひが何程〳〵ンごろ人わく人ひ路へ来られるひ沢ヲでもるく人
丙午ひろ定ふ悪〳〵くるヨ ▲「ア〳〵〳〵手拭ふ安ふドるひで
戸 駄菓でも お吸ふ成 ・「トキニ 店内宮さん アノお連の 人い
お茶さんの情男ふる 程量ふ成ガ何で 出ふ子 ▲「ナニサ
梅垣それを笑ふ及わく あるやア 適ふ 鐘倉辺ふ情男
ガ在て手人の後を追てお出ふ成のでおるのせう ・「おるる程
あれへ駆く 考へてい工それぢやア あの人を供ふ連て糸切を亡
命とひうけてのごろア〳〵 何程も色落者とひるのふ自殺ふ
知れるヨノウ 梅垣 ▲「左程ヨをーく 女の色落者ハ大里合宮森
客屋ごろ 用るぜ 此方達も 何年内宮さんの色落者ふ
程ふ男ふ多りてお茶さんの程ふ義兵内宮さんふあり
付て見てくんごト 思て おる義ハ猫どキリ 刑よりの後ーさ
今の刻の落とひ 何れふ七も 我身の上成 程度なせー
好斗の程言せられる 怖ーさされども 猫身を見せずと
左も 多き風情ふ 猫を義ふ色落を「ヲヤ男 友ふ支を お言ご子

ままーさん　私ハまだ稽古をするので旅を出るのならば　若旦那のゆくも山に西風
の楽しみをするもあらんけれど　叔父さんが大変で　そのあとの
嘉月があり　て　ぜんざいの出　早く　度々　後の人の
待遠で　ならぬのでござる子　「アハハハ　叔母さんとよのでもゆくの
ならぬ　世の中　ぞう　叔父さんぢやう　狂中　いかなる子
他人の変　叔父さんと　縁で　亜のが　いろ　「オヤ　ちやう
這ひるのサ　叔父さんも　お茶　ゆの　嘉乳　でぜんざい　や
せう　「ロレサク　ハリ不　ちそんるる成　言やるナ　それぢやう　狂

の　ひ方　あよ　ぜんざい　分で　出来　ちやう　挑
燈が　消　ぞへ　ひ　五　「ナニ　消　ても　大　ぜんざい　ゆ　せん　ぜん　方の
刷　ま　ぶ　ま　火　打　で　財　や　ま　ら　ま　「エ　刷　ま　ら　ま　「ナニ　撒
燈　を　ま　れ　て　ま　ら　ま　路　へ　引　て　分　や　せ　ら　ヨ　「月　刷　ま　ら
ま　る　ー　燈　火　も　入　ら　ま　の　サ　「それ　で　も　ま　ら　ま　ら　ま　ら　乳
味　ぶ　ま　ひ　ま　ま　ま　ヨ　「ナ　ア　ニ　サ　ま　ま　ナ　怖　ひ　ま　ア　ぶ　ま
やせん　ま　れ　で　も　東　海　ま　の　狂　来　ぶ　ア　ナ　「それ　い　左　板　と　出　内　室
さん　ま　「アイ　「ナント　ひ　二　人　ぶ　ち　ま　さん　ま　折　入　て　お　ま　ま　ま　ま　ぶ

おせん女郎が何卒お国を成ちやア御前お帰まへ女子心〽ヲヤ
左様久しく何ぐらゐ知るまひが私の身に叶ふまするなら気の毒ながら上様が
何事をそのやうに言ひてお嘆きなさる〽イヤ其は有ぐらいがおせん女郎十二
他の事でもござりませんが何卒貴様達二人がお孫
さんのお情にあづかり度とのお望ひでおせん女郎の身〽ヲヤ
何ぞと言へ情は先刻の金子に酒代でも呉るとおつしやるの下
不義非道を言ふげなと知れどもそれより国の風俗胸はさら
げどさうらふ体何ぼ誘ふ弁ともは浮名笑ひ〽アイサ陰お内のお家様私

ら私は酒代も金も入りやせぬト
是より陽に云ひ秘密の書あつて妖法の術を遊んとるもの邪
道に行くお身は命を捨つる事も身を穢されしと覚悟
あそ居る事もなく少し恐れぞその心底大盤石のごとく
すこしも不動
〽ユレ紙吹をヨ此の男の懐中は浪辺不残つと探り出しに任
せて来るをお嘆きつく欲気を放れさせ此方の手ゐお前のそのちか
あるぞいぞかナゐぞなんぞと陰情にてもねまかけて足でも一ツ

猫なぶりもて翫ぶるざんぶり荒海の底もしれぬ人アレアノ
浪の打上られうち沈んだり海の苦痛をせうよりもコレサ
一寸常に返るものを返るもの入あるを家
幼者でも呑妻子の気性を呑みて公の質生涯を公
死でも涙ヨ涙で関べ私ホの為の内縁を捨置して連の
男子へ親戚さも私を引放して賜ふるんぞと余り有る
ちい孝ムでヨ孝ムが義和ちろ あるを子ト思の如くるる一云ハ通
ある覚悟とりめべし

第十四章

幼育の温順お花が安和変ニ自宅ホ可成と思ひの外
烈しき辞ホ驚ロ拒絶二個も少し猶見て久我ぬ顔色
合て改むと狂暴中ホ透を見て命限りと逃出お花
ドウコイ左様へと二人の白徒私ガ捉ふ医師忽ち追付
引戻され引戻されても振排ひ振ぬけ逃て妻を捨げ
花アレエリ人殺しイ〳〵トヨビ叫べど本精の邪魔義へ
あるれ山賊の奥の方ホ逃て二人ふたの迫め

られ柔弱女の途方もなき仕業をさせぬ抵抗と手拭に小
巻付て肩に引ろぎ組よる場所へ押倒る折も
松の木蔭より現れ出る一個の男彼二人の加勢を
右と左へ投除てお花を背後に隔て思ひ白眼つめて立
ちたん仏地よく見者へふけりを自住もへ起より「ヤイ彩
アヤア」の故邪ナ女ヤアヤア妨せもアるのと下ヶ
荒海へ屠込ぞ「コレヤイ此方笠の横も名も知れぬ者
方い力為ヤアるのう俗而の言の骨ら志れへ方

の横を覚へて居るこそ此方を所の砂郎ヤア
のこ子似後のあれ此方さ面のお名を言ぬ者ア
ろ拵お打き創ち是ぞ格の眼八掘の九右さ名と
号て此海乃ふ隠れの者へ拵組さ面ぞ多並の程を凡
中アれトのよう早く左右ろ飛ろを見て拵ちこ
ぜ出るる面人や人已等が拵る乳家ぐ又人や十人
ア之と後む拵る此方ちやア わへで支言ろう云言わへが
吾妻ッ子の まるで此拵る非を他見ろう捨て並のが

世界わんくらいちざる世活の悩まれ役も後の懲しめ
じゃ 背負ひ あえて売れやアがるな 鎌倉の米町ゑ長ゑ
弟きんと法作のごハト言ひ二個を嚙り起上るのを踏
発せべ手早業と力量ゑ白徒ごもいあのぎ怖れ痛こあせ
押へるぐら最尼若しき形容あて庄屋を引く逃さ行く
長ゑふハ時ハ 長ハアハハハハ 倫り屁猩のわん奴 笑ごトゑて
たゑ紀をしてお義をいたり仕ホたゑせしを拭とせ 長ハく
義毛をゑよさそ怖しうさらゑノウサアくもウ盗人ゆうを

逃げ出して仕ちうとうゑ何も氣ぐひいるひぜ 知を丈夫ゑ
持ゑ世人 赤ゆ上ゑ 伝発ゑ 奴が まさらゑ とりてめし
怖れる 逃へわん ト言ひそ お花へ地獄で伝ゑ逃てあら
せ一ゆうも ちきる 四ひの 仕場の 仕戎 実 長ゑふハ峠の
地蔵 藩 場の 仕紀ゑ 嘗 紀と あて ゑ ゑせらる 花
ハ 姉 き 手 ゆ ゑ 又 案 ゑ ら く 人 ゑ 長 ゑ ら せ さ 人 級 ひて
怖れ 怖れ を 嘗 き つ 只 ゑ を 合せて 程 を の ハ 安 ハ ゑ ど 今
見へ ゑ ける 長ハトキニ ゑ ア お義ハ 一人 旅 を する の ハ よ の や 左

根でも左手の女の夏ゝ連の人の供の者があり
ゝのゝ丈へ行程しこのごまト同じ見てお花い途中ゝの
る後見よゝゝ世世けるべ長ゝん情況て長ハテナ不足
ぢやア主人をも手捨ゝ考れるひ行ざゝウ保証景を同長
ゝ詰もめぞ行程せゝイヤ形仕程お茶をひ月が知色
家まで送りて行て丈ゝ設人ゝて返して主長吸ゝと
ちを抱りて半ゝぶん多ゝ丈ゝ一ゝ丈ゝ一ゝお茶の足ゝ長く
ゝごゝゝ。ハテナ誰ぞ子分の奴が一人二人来れべ縁グト思

葉の打ゝ良精切りて色アを考ゝ彼長助ゝ方ゝお茶へ
月新ゝ透して見る俳へゝゝ行ゝ主妻ゝ伊ゝ
あび立かゝ後へ主前へ来ゝのハ長助ゝ
作のハ出内居ゝゝト言ゝ側へ近近付情ゝ
飯ゝて乳ゝ考ゝ尾ゝ情ゝと看れハ側ゝ
イむ男善悪知ねバあゝむ既情お花ハそれゝ推ゝて
前へアノ駕籠屋の言合せて私を叱所ゝ連て来てすんでの
丈ゝ色ゝゝゝを思ひ げけゝく叱ゝお方ゝお通ゝぐり

私の横僧白徒を懲らさせて故ッて手下のものども
ども方の私爰を除して差らんと今夜出でて来る成
あご くら寛ゆるい思い台ござヨ紙くお礼を中上そ長谷
ト関で横ゆ表助へ弱容を正しく首をひげ へそれへ
ア弱い夏でおざるね。イ母親宅ゆ言ゆ信
切ゆおろげ さ夏で主人ゆ助りまして安堵ゴー
ゴ長へナアニお礼ゆ及び ませね おれへ私ゆ生涯ゴト
言ゴゴ 侍を見やり 長へヘン殿人ゴゴ如る侍ゴ見て

迎ヤアグゴさア〳〵〳〵
彩て長ゴ布へ頼母しき男ゴれば お花を後の親子
ゴゴ 関でおれを多ゴ みゴ とゴゴ 護摩
崎紙 ゴ それゴ 藤宿へ 泊ゴ 剃ゴ 延ゴ
ゴれど ゴ布ゴ子ゴの 藤宿へ連れて泊ゴれば
宿ゴ ゴ 故障ゴ 信切ゆ表を ゴ 報ゴ 集会
ゴ ゴ 思ゴ ゴ 振ゴ ゴと 福次の 和巳の方へ長
ゴ布ゴ紙を付ゴ又 途中ゆ ゴ ゴ ゴ時

夜角力や
月八ツさ
手ぢ
さーと馬
矢州高
高ぶきま

なあてがき
けく紙を出し一番せるだろうゆえも詰和よる分が
変くなれば去る所と客を関て城多ふ案内いと
去まじと番りを斗らひ出させけるが色ようふる
ぶ少しを去る白髪もるく漸く春へ〳〵と孝助が
尋る叔母の住家さえ清眼鴻と関されど町のゆえ
まで入ざるゆえまず錦舎ふ入り一日の旅宿町
ふ宿をとりて去明日ようお花を探ふ行く孝助
清眼鴻の町を尋ね歩しが他更消息ゆえもい

せしう一向ふ知れざりしが三四日目にて生国の人ふ途中
るるう久しぶりふて再会せ人へ虎蔵ふ出ふ行りし
節より孝助の叔母ふ会て上方の方へ〳〵もるせ
去まりしより叔母ハ男の孝助と名乗り男ひ
居るよりふて毎度呼もまるる多り但研も結知
れバとて案内せしが孝助ふ大きふ怪び恋さ
呼ねいろしが叔母も男ふ成りふて暮せバ
う永遠しく久しき沢ふ加年同者友達ゞ

身の如く拵へ上げ吉兵衛久々の対面なれば
その悦ひいんきまく あふ程に湖を渡りて招かること
あり 女房助へ申度 遥々と来りて こけを
要変うとり ければ 叔母へ対れを関て一度い来り
恵申も角のもるくとひ番ホとりとる 鶏の形ホ
見るかの易く 来初 おも 偶ホ士年 長民
ひ話を言へ 女房助よりこそ 旅ホふう
形を 叔母の所へ 傳ひ 対面 さけ ひよく 委く

相談を遂げ 当夜の中の労を 保養させ 女三
日 女房助も休 居 けり
再び女房助の叔母とは 知る人ぞと 思ホあれ
則ち別入るらば お縁の妹 お春ぐ 栄次郎と 偶ホ 移び
所 ぐ 吉 お 明ぐ 吉 あり けるあり されば 此 孫
場の 女房助が 相談を 受 情と 考 の 思ひ
出 て 考ホ 彼 お春の姉 お縁の 晴人 箕吉の 吉と
今度 家へ 入り お花の 晴人 箕吉と 同人ホ相談

あらざる事を覚ゆ〳〵ければ 閑雅平淡を感ぜしめられ
たるもおもふに成度なり〳〵おなじ花のうるをぼうして
おなじ緑なるも別に色を出て別草 其色ふかを逆せる松ふ
たるうへんと思案 とべるせ〳〵ぐさも いなづ表 助ふもこの
宵緑あるるるをたるさざおなじ花 ふへ 猫更へされを きれば
るるくふ知るようるく ふ 其色ふかお花の下向るせるを
ひ〳〵告知らせる 相渡をのくるるけるが 此程 其色ふ歩歩
押込られて 主所も 他人 ふへ 知らせ 知ふしてあり

ふの 鳴るれば 異 るく 見 教のうるり中る 紙 お花ハ 慈
て 動を 紙ま せども又 経方ハ なるるける

うるるおるるるタべのみうへ 秋も 春ゆ 鳴永 春英
今 れも 分ふ む 萩のうるり 風

秋色艶麗 處女七種三編上之巻畢

秋色艶雅

處女七種三編中之巻

江戸　爲永春水編次

第十五章

わが間恋おもきさんをざりくるお照が宿業の便りにかろろ
お縁の情も実ゝざりしが或日お照の戸口に尋ねそまる
一人の艶麗女形りゝ人も乃遍る風俗物のゝ
繼衣裳なれども何所とゝ所柳所見やるもゝ
下女ゝ帛包を持せゝ隙ゝの外ゝより来ゝ女八イ

免許成ましたノウお娘さんとお名号許成のハ此方で
御座りますか之人 娘へハイ此方でおざります 女へ左様なら
御免被成ましト障子を明て家内へ入 客のある処へ上り
益繁昌居れバお娘へ来まして 娘へサア此方へお上り被成
まし ヨ お客でハござりませんヨア此方人ハ遠慮なく 女へハイ
左様ならハト会釈しながら 上へ上り 女へアノお孫さん男
勤にお目にかゝりませんが私ハ前妻の姉の孫と申ますれ
あの御座りますが毎度妹が上りましてお世話さま

あり難ふござります 此通にお礼に上らんと存じて居ますけれども
自身業に掛けてなり御不沙汰をいたしまして 娘へ
左様でござりますが 御婆さまお勤にお目にかゝりませんが何でもお
婆さんに似て御在成なされる大略お姉上さんどよく存ど
ましたら縁有 今日ハお来成て下さいましたれハ 此方へ
御張なされまするお嫁さんもおめりおいでなさいましたから 御案内
申て居りましたヨトあれより追附お定まりの義理合を述
云事実をお娘に主礼を言て茶を出し一鍋菓の

火を使ひ彼男と世話を言ふ後　ろくべゑ　全く私は世話の
所宅へ今日の昼日上らふとぞんじて居ますぐ宿の
銀杏の節はお世話下さいと渡せば公の
中ふ茶ぢつ　ろくべゑ　アノ物の内用であり申さる私は先茶を
出すべ内を表ろく書仕て行下さい　但又書ぎ物の
お茶さんは内者労をなさと変でもありませいと
早く　お使者　成て行下さいヨ　ろくべゑ　イエ仕振いと七手振合
たばぎるまんヨ　実は懐中の銀を使ひ

ぎるまして子　ろくべゑ　ヨヤ　左様でどぎるわまして振ろうべまして
文を出ぬ　成て行下さいまして　左振ろうべ
あるまして遠ろうやませうが所では腹を出ぎま
ぎるまして狂ひけれど二階へでも物音おとう
成まして振ひ中変ぎるまして兄弟の宅で
おれの毒ぞんじまして　ろくべゑ　イエ仕振いまして左振ろうべ
お物でもお二階へ来ぎませうろ　ろくべゑ　イエ左振ろう　物音おと
ろくべゑ　先ゆき二階の階子へきろと

あか「アノ子さんお茶でも入てお呉よ　ろく「イヱモウ構なさるな
お構ひ被成ますナーヨ　ひとつ又お花喜助に向ひ御来人様
も御免被成まし　ヨト会釈してお縫と共に二階へ上り行ば
密談の次第ありけるがあまりかゝる事なれば其吉が坐敷にて
遠くゆかりあるお花の身をうち明てお縁に譲り頼みしなる
べし元来お縫の我目は姉の気性をお縫にもなりしそ
娘せし由ける由来其気をなりてお花の身を深くさだめ
ぜん該奇せしなり宗み不連出来るかね　お縁は部で嫁
なく解て和順素直にお縫も悦び笑顔になり拵てぞ下へ
おりて来りお縁は以来の邪意ましてきはし思ひ入ある
自然と顔にも顕はれしてさも寛容に座に対てお花に向ひ
継しき心も深くしく　ろく「モシヱお花さん私は只今迄
お未練をも何処の地方を盤詞くしく御挨拶さへも
いたしませなんだが真平御免被成て下さりまし　ト
言かけられてお花もビックリ奈何なる人とも心付ねば
急に返事もならざる風情お縁は猶も態と進み（つゞく）

お豊の伴ふよりくく
お鶴
お花よ對面也

陸奥おもかの松のお鼻の上の出板子ともに武家のお御殿
お供中まもり　しづ子　紙子　去の屋中　おいとまの
出信州ふるわてお出成まもり　ねと　音お　弘　お
家ー　やすと　真ゑ　身ふ　深て　相ゲ　あげ　ゑて　悲ー
ゑりまもりヨト　おもくぐと　せー　お　孫ゲ　ゑ　業　仏　人　ゑ
ゑ　話ども　什程　少ー　嬉　ゑも　笑て　美く　ゑ　ゑ　ゑ
合ゑ　箕　ゑの　情人ゑと　推量　ゑれば　いよく　面目ゑく
お　花　ゑ　選ふ　船の　ゑ　縁ふ　大家の　振ゑて　世間ゑ

不知温厚く　内室　あとゑりー　身ゑれば　形ゑ　節
ゑ　前後と　ゑ　ゑで　ゑゑも　出　来　縁ゑ　猫の　中ゑ
ゑ　ゑッ　ゑ　ゑ　ゑれば　お　家の　風情　花の　ゑ　妻の　去
地ゑで　他人ふ　別　易ゑ　ゑふ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑで　清洋　ゑ　ゑ
人を　簒　略　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑ　人　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
何ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
後嗣　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

あるを変斜左も高と申ふ点をあげて　ハイお初ふ出
ゆ
居りゞいさーまして。アノお茶さんハ箕吉さんと情合の名
お方さまでおざるわませうこアエ若左様あるべ私ハ面目
ありを変でおざるわまして　うらお茶さんふ対しテハ恐悪
ヤサ　あけれバあり申せんが何卒美吉様ハ嬉恵成生
高て此以後ハお心易く　一緒ふト頭をあるふ拵外て言
葉ざけ　あふ何とぞ物和らっある挨拶ふ嫁ハ氣の
毒迷惑ゞり　ろ〜アレサマアノ　まあ様ふ也　打盛ふ成ち申

私ハ困り申ましョ私様通り　私ハ箕さんと久しく　お心
易くいさしを居申ましが出　存の変て　変化産ませうけれ
ども　を来ハ箕さんが宅ふ仕合が悪く　お成　成て
殊ふ此節ハ市親教の弟一　だん氣ひゞうハ　お家へ
頼けられて一ト月の内へ　押込ふあり　お左でと変
まして　ろうモウ　氣ゲのめて出　ゆ〜ムうてあり　ませんヨト泪
ぜうろ〜　お孫の拵ふ　お花も　さそへと泣ふ　あるを
嫁て　花〜ヨヤ左様でおざる　まして　ろさぞ氣作りでお左ざ

らみとぞんじまして工夫程で此方へ参りてもお目ふて
られるひまがでござるわ　ヱ〳〵アノそれでござるまして
何卒お茶さんも力ふるる様よーく上てお呉成まーす
モーて不形まぐら新うち解て和色ふるりまして夫お茶
さんと私い婦婦ごと思りてお呉成ョ夫でるければ形
ませんヨ　左様思うてもお呉るるべ　私い方　何様ふ嫌
あい変てござるわませう　実正よ　左様してくださいまーョ
偖私が此身のひまでござるわまして茶さんの気ふ

障る様ふ変がありけれい様とおもひまして　ろ〳〵ヤく　て
私がアスるて　ござるわまして子此様ふ野蛮ふいこーて
居さ舞て何卒も祝儀正しくい出来ませんろう賤しい
女ごと捨て　お仕舞成成まふ　何卒　茶さんお教成て
ください　宜下まーョ　是〳〵アレサ　左様おゑごと　移更私の不足和表
でい　親里へだろうでも他人さるのお笑ひ性ふるる変さらふと
お恥ろうぞざるわまして　ヨト平ふ卑下まる方殿者様ろう
お嫁の事口へ新乃人形路次隠るれば角ふ立てる様美ひ

似ようの似ぬうへあるねども二芝居俳優たるべき

「田舎ふ稀な女子どもと目を付ケを付て居れば

いつの方あへ都親ようなふ成成へあのび下

ー義人の下略

お爲へ稽ふギックリトあるうと見廻を日新の身お嫁へ

完ふうち笑ひ「ヲヤ不あるみ奏ようぞヲホ〜〜 俗お爲さん

お図ふ成ヨ芝居の世ようふみも都親と覚そいふでいあり

せんゥ東とりへバ恒生の小家とう後そりふ文句ゲでをへでの

板しとも田舎めくぞへあり丈せんゥヲホ〜〜 老アレマア左

板早く茶ふ乳ゲお付ごうう京都ものゝ私るんぞへお

茶さんの意ふるうさぞ博ゥ物ひ為品乳と

板よお思ひごうふとぞんじまたへ甘しの中ふ麦

助へ世ふふうあき男方何のるみ中 仕出し屋へ酒

肴を大急ふ桃へうと思ハれて早くもたべ帰り

去うバお嫁の茶ふさし出し見より場付盃の意あり

と意ふ〜〜人「意ふ存ドゲけるひ市祇園ふ

まして御気の毒ゆゑぞんじまゐらせ候の辛お花さんは
姉さんと同伴ゆゑ私どもへもお出成て手下まゐらせ候さん
左様に先刻も中と通りまれらう実に婦人の様成て
お呉成て偶くゆゑ其さんを伺辛世ゆゑまゐれる様子に
よつて手下まゐらせ候へ共お花へよろこびて長助をもその座へ
呼お孫ゆゑ引合せお明の男あるゆゑ又あらぬ云出しけれ
ばお孫も長助の実意を賞て丁寧ゆゑ様子ゆゑ
解相ゆゑ久しき別際のぞくゆゑ最暇まゐらせ候ゆゑ

第十六章

長助はお孫ゆゑ委細の叔母様お伺申
あげまして有さまの世話ゆゑ主人のさきをひらいとまゐらせ
遠くと連て帰りまして長体るゆゑ辛苦の所汲
つけ申さまして伺辛宜敷お願ひ申上まゐらせて
平伏て挨拶まれべお孫へ同ドくゑを下けて アサマサ
京都のお人へお女中衆でも男子でも宅ゆゑ叮嚀ごろ
私へ伺様いさまふるさぞんじまゐらせ候ヨモ汲来伺辛お友達の

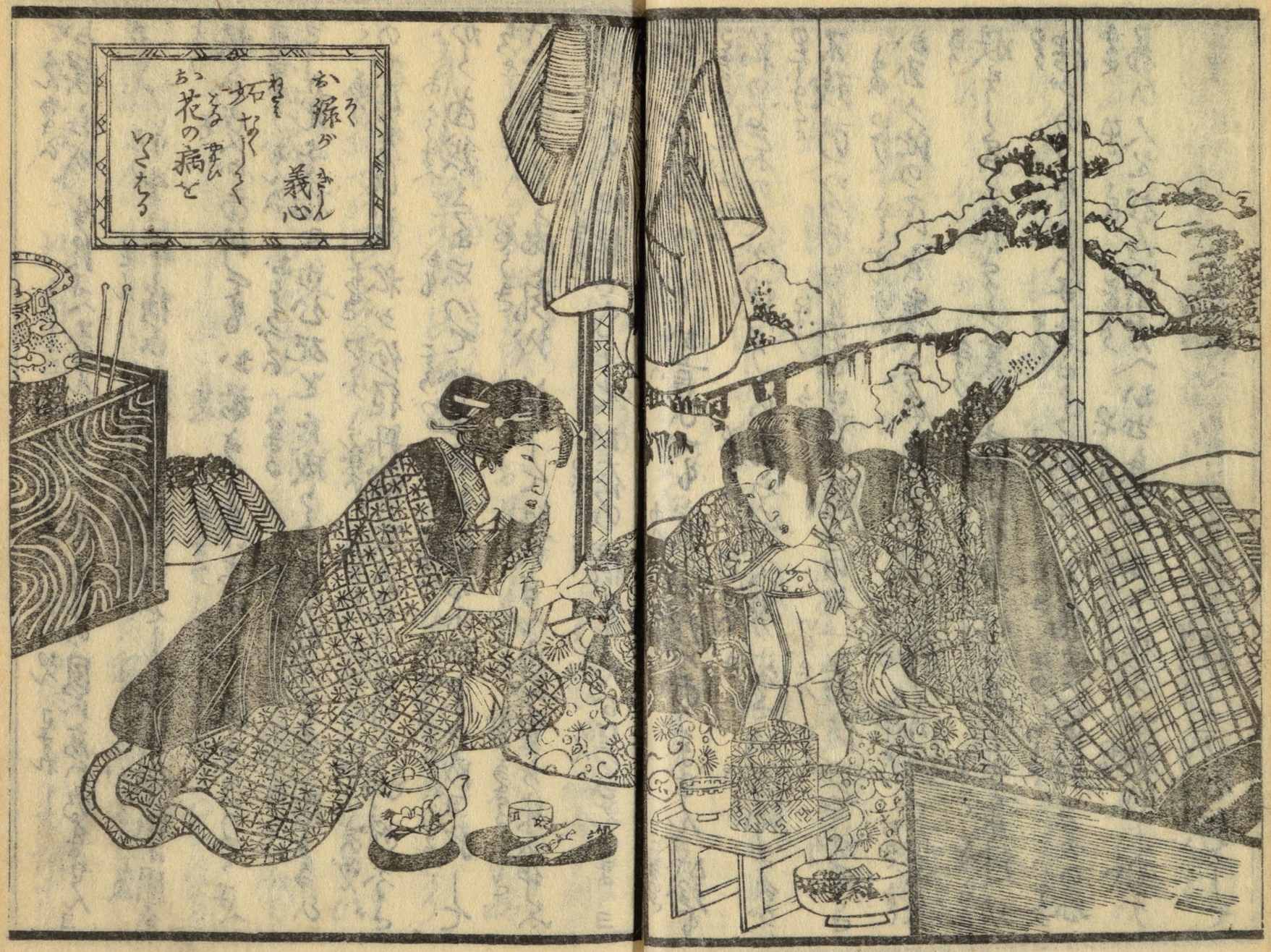
極よしとやきもきーナ強それでも今度お花さんとお連やて
長の座中と寄ねてお出成きーと子ヘト手を実信を感ぜして
喜助と愛をるへお孫ゞ亜の生涯故なる
丈箕吉へ手を取の孫ハ二世二世とも契りくる添き情人なる
ものゝ玄ハー箕の中でさへ都の宮体を見し第ハ多分出
来く悔ーうーと一出箕の如きお花のすゞ復立を理なる
眼前表れる公の底と出べ新勇ハ思へ人をてこれを捨しを
云腸ハ姉妹のでくるべを手方さるの
人の公の形無しきまでを推察して簡略ハせぬへ連を
温度裾人なるや初てお孫ハ実の姉妹の形を
初を合せ漏なくきーゝーうーしゞ彼箕吉の身の上いよく
嚴ーく押込られ門ハ出もるこれ孫吉とうりお孫の
絆へも便りを其で通路も絶ーー憂思ハ花へ孫吉箕
しさの情りくて痕とるり形ハ対て家ハ用次第ハ変る
急病の極も上りね程とるれべ お孫へ吉れを憐を家門の
吉又へお出ハ仕せ日毎ハ通ひお花の側をさるれず看病

まる実意の他見不看ても血をこけ　中ありとも嚙
やどの兵衛へるまでと笑ふ人くるあひさつれども兎角有
おもるまま病ひ医師も防る格子ありそまくの死かの
宮仕痩衰し体も落き孫ホーの其表ホ不逢ろれを
遂もせべさぞろのしも怪ろれれ歌きあらんと来すれば表
紅梅顔ろもう看服もうるし女の情泣ていひご病人の恋
もく種蒔しもまるを出る胴を押張し分年助令物業
多代のあるうと俗を落しめ花の側へまう蒔て　〱花さん

お花さんの真づひが伺ひもお客様　そんでありませんが出一と
捨ても進まうと　若〱ナア二捨てお呉でるが何でもよろう
おぞろまるまるヨ　丈よりうお孫さん　こそお男れざらうくう
ガーの男でもお体を　兵成てお呉兵成ヨヨやお花さんお泣
兵成の久　〱ナア二泣へ　ちゃせんが子不圖眼の中へ蠅が
たまりまして子丈板　泪が出さんでおぎあるまるヨト言終
らしても変曇るお孫の風情をみてしろお花へイ〱上
私が竹箒ホ然りて　雪登存令　変ハ不出来と云果で

それが不便さにがつて泣てお呉なさるので孝行な又夫を推
ら気を揉ませまいとお思ひでお隠しの御信切ハ実に嬉しうござりま
すれバ西登私も今段精へあがらぬと覚悟をして居
ましたら何卒お嫁さんも不縁に居てお呉なさるこちら様ニア
泣など私を不便がつてお呉ると却て私がお嫁さんの為に
引されて黄泉ならへ行際りにまりせうヨ左様さし
なるでなう思ひ切らせてお呉の振さと能ござりますのに
「ヨヤ吉相出しひ支をなさる気成ますナ良人お園

師さんがむづかしくお言ひでも案じる程ハありませんヨ此様
私のおもはの人がむづかしい病気で大勢さんお医師さんが
不残踏かりてお薬を呉なさるのに一番後口で御めくさ
お前が此の長吏さまといふのが自慢して作で此か全
快ましくあれどうら薬も方にお真似さうにしと定に其功
能があり升ぼんハ子丈どうら私や今轄さまお医師さまの仏
まきまひ人を拝んで此方へお出なされて此下様子お顔ひやや
ます「ヨ見へヨヤ左猫でござゐますぼんが程くマア仏印をして


お孫ゞ義心
妬なく
お花の病を
いたさるる

お美代成　まだまだよへ死んでもお茶さんの国へ来ませんヨ
ろくでアレサ　まことに私の支をお言ごヨとして私が仏の様ふ国る
様の支がありてもお茶さんと来ふして泊まりのくるへ
早竟手様ふ心配を兵成うう嘉乳ガたやく、泊らるひ
のでまだいる　私ガ仏狂丹城をみるとりて姉妹ふざ
かう当然ごを思つて仏事ひを不為ふお主兵成ヨ様して
仕三も早く病乳様治して箕さんふお重ち来年ふ
ありても他様でもしとおたの様まして　お美ヨ

支ふ　しても早く金妓兵成でありひとれ行ひるへ組合ふ刻ふ
戸箕さんがお出兵成てもお茶さんガ手様ぢやア深晴
さうしも出まぢ只顔を着て姉しひとお思ひ兵成だろう
でハ無益でハ居ませんう私ガ思ふハうけありひけれども
様ふ丹城してお茶さんを着居ろも仏事遊者ふも成で
箕さんふ合せ中度と楽しくふして居るでおざるまりたま
又お茶さんの楽しくも出来るひ様でハ私も面白くござい
ませんヨ　若へ杉角左様源実ふ　お思ひの処ごうう家慢ふも

平金で箕さんが毎度のハ山くでおぎみまいるが西絵けひ
ヤ沢まひヨト言つて落る涙の雨もりろ元さ久々まの美
時宝るらで家の下ハ衣れをそ西ら竜馬もあろくの
音ハ叮嚀ノるお涙の心を知ろ力を付ろも附
らくも女同志の乳繰さハ自然ノる乗ハ合て
又も悲しき見捨ろうしがお花いるホー乃中の紙幾
をさんも見ひ出ー花ハアノウ嬉ある皮を言葉であ
ゲヨ伺祝しても祝ハ山祝るるホ門で箕さんハ出ーひ

別れを去るホ定ヤろそあるのごと思ひ出ヨ くハヨく伺祝ニ
花ハ十二ヨ玄沢お茶さんもお悔ーやと薩摩峠の出来ゲ
則去ろれさ通ろホろ茶表と出ろ久ろ思ひ出沢ひ くハヨ
お茶さんの殺門ろのも似合ろひ更衣ろ皮をお高で
るひヨ山間も手祝るたろーゲろ三ーゲろアノウ板橋と
ひハホ猿切梗ろハ木ゲあり出ゲヨ花ハヨくホン二ろの
猿切板の仕しハ京都でも知て居出ヨ くハ井アろ
猿切板の下ホ蒸見世を出して居る姑アさんゲ壮時分

かゝる聲や眼の縁人を宮ふ数十人しとたゞ子を結
さんが其結をする第一宮初ッうゝ縁切板を割りて紙に包で
祝云の晩に拵して参りさ毎後日で離縁でもする第ふ
言狀を知るの出きあひのとゝふ面倒な支が悪ごうゝ縁
を結べとゝふ縁切板を後して亜方が平人面しゝごと
いふ不名で左根しさそふ仏根しさ支ゝ縁切板を
守袋へ入ゝ縁人して差ゝさ聲も姿も一人も縁を切て
離別さのへゝとゝふ必しを図ゝしとヨ

第度自分のこゝを若無ふるのを後悔生涯ハ子ト
言れてお花も苦笑ひ花へヨやゝ左根でおざお子ゝ可笑
支をお言ぶ空ぢゃアあり生せんゝねトゝふ拵ゝふ表面
もおゝも柔の側へ寄り倒くふるぐさゝゝゝれど花ハ
花角苦気ぢゝそ見人ふけるお縁ハお花の拘元を
抱ゝ捧ゝつ炊抱すれば苦痛の和ゝぎてや軽て
眠ゝ根のれば各ゝ傷ゝの名ふ出るお仏ハ兼て看病
の労をを屬ひ親人亜ー酒肴をお縁ふすゝ考

助ゆも相伴させ其方も千く席ふ連りて憂を晴させて
ゐる〳〵ホンニアア仏様ゐ様ぐんふ
振りるぐらの所るりとちらべ〳〵
箕さんと逢一度めんごさエ如彼ふ困んで箕さんを慕ふ
のを他目で見ると哀れでゐらるひョ　左様サ実へと
ひべ医師さまい乃殺〳〵して業も器ぢア死ぬのを待て居る
様なめんごけれども亦箕さんを慕ふ一念の力でひが正
然ごけれど左もるひとモウ義中ふるひて仕舞のごらふ
と思ひとお慈悲そのでるりませんのサ　ア〳〵ナニま左様ごけれ

ども又箕さんふお逢るうべ手紙ひ所で夢一枚乳様よ
お成ども知れるひョ　左〳〵左様サ　手紙ゐう様ぐ箕さんふ
急て乳ぐ後んでカックリと仕生ゐう仏様〳〵めんごらふち
それも乳果ぐゐるい様ぐ　ゐ〳〵それもおまもえへとひへ私ぐ
悪ひゐう箕さんの身を不自由ふ　ちさのごと思へとお様方へ
対しても面目ゐひのでありまるひョ
お録ぐ如新りめい仏様ゐれば箕吉ゐ糸切ゐ帯り
ゐる涙ふ哀しさ金りて茶渡を矣へ〳〵ぜ数度お涙の

宅へ招ぎて遊しめ給ふ それゞ故障とありて当日押込とるゝうれがい花も盛せられぬを後悔しく

西日ひとしらるゝりけるを

。

秋色艶麗 處女七種三編中之巻

（狂刻亭 春彦戯作）

（笑刻亭 春友校合）

寡丈乃彩まつ君や袖みく春 春英

秋色艶麗 處女七種三編 下之巻

江戸 爲永春水編次

第十七回

雨露ふうくろまべあそ楓葉の紅をうぎる秋の来ふけりと詠

あへ友人後徒ゞ秀逸てあそりの教刻とあふられきれとれの

人ゞ苦楽ふ河希あるて粉愛まる度を指られば只ふ

をのゝ男のて幸苦を勤めそそれ蔬ふも苦へ楽の基ひふて

歎くふ余り楽しみも又悦びとるるるひの春ふおそらで込ふ

我身せばせばかをかく身を養のひ第十文も四第を清ふあこ
ゐ一されども浮世の形体左い指られね枝ふこそ氣を仮さも
ことあれ所為多くあり家ふおあたい日ふきして病のあやもむづこく
あるよ中ら或歌像ふ絵を著しあ病いかーもゆうむるのたく早ゆも
ま月もあるもとと知ひきられべ悔しく形み切る流中ふ泣
の涙の家ふ中かくるはるふ枝も力るげる風情ゆて
仮様しこう宜らふ子工実ゆよ子行るひうねへ左様少
仮をやスるる労れ切て成如で如世ふ病初ゲ来てふ

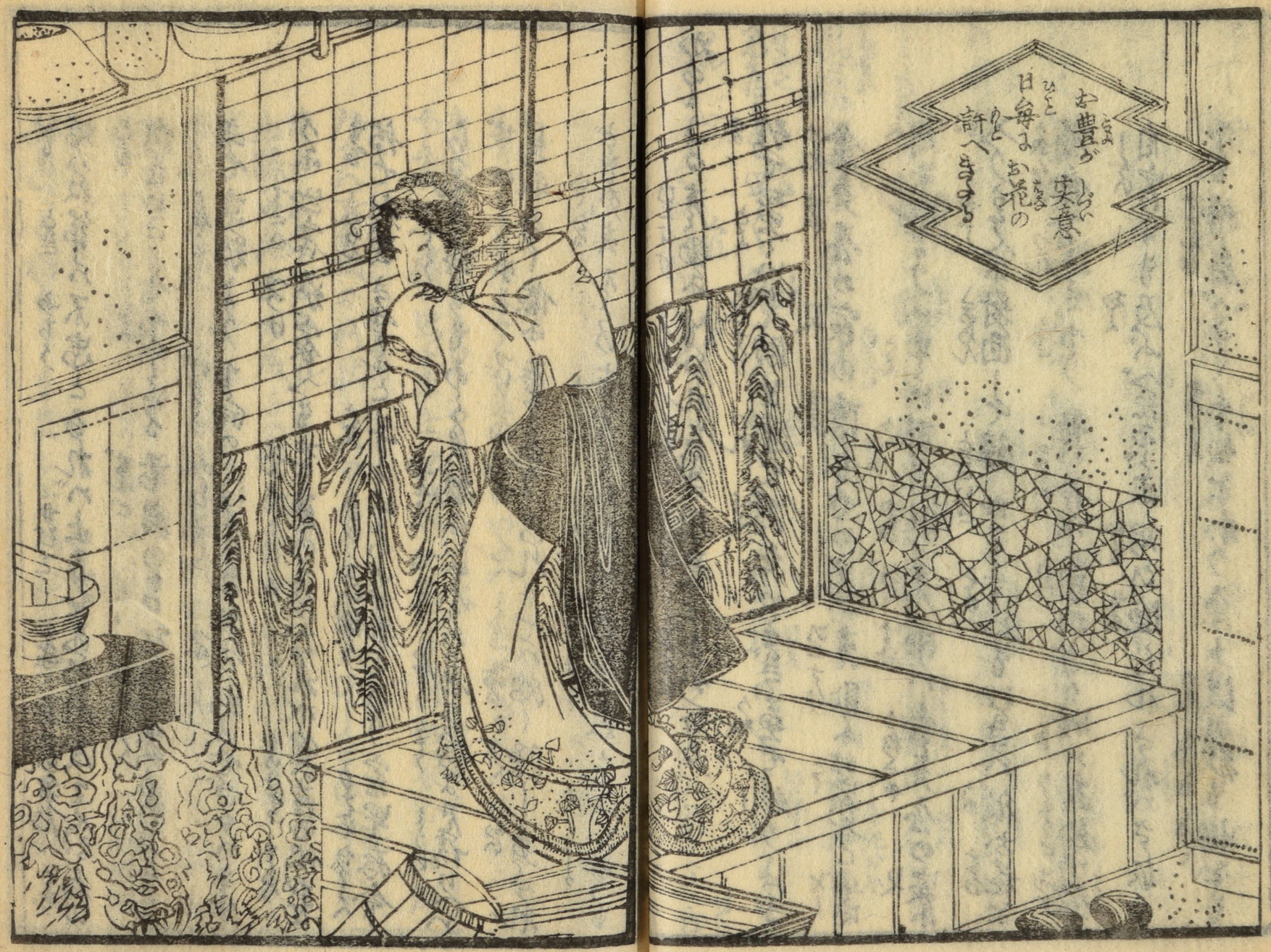
迷もむづうーふ元西屋生せうう仮卒著踊でも歩様すーて
あるこい多度りめご〳〵イエ工されも其きさんのうりふ迷川てお左ごうう
ひよく眼を眠ふ主夏がるうびふお左左成のサ〳〵仮様うく
多度ごも其きさんふ盗甘そ多度るものご子へ工考さん仮卒
一ゆん多度を考へて其きさんをお仮ゆて来う様ふーてお呉る一せる
こ夏の左中一月ごも遊甘そよてこくびひよく成仏を行成ご
らふよおいとりひるる天同へ仮様生るものう宝早郎るくらい
仮もすぐるいのハね人年意ん上よくお成行来古文もあふう左様

あて日がらも悪敷ゆへ其様も他へ出られる様子なり
居ふお盛衰成変も出来様と思ひて居られべとも私の
身はまだ大ぶ厭つて居と様なものくなれ内室様ら世
不幸歳月ふるひて万事ばの中も変きるひらう
それまで是金の始末を不知言ふ注年せうう子 ろく〳〵ヲヤ何所へ
行 ヲヤ〳〵ナニヲ 出ふ今うう 頭高町へ欠出して行てまるる
私ら悪るふして 其右さまをお連中て来て今の内ふ
お逢せヤサるけまべるうるいト思ひ極めて言出すべ

おの言の葉を使ようも 歓きの中ふ 悦びの使りを行ようひ
ふて ろ〳〵ホンニ左様ある 変ようら 伺の幸左様して上ようが 解ノウ
それだやア〳〵 迷ひ早く 行て来る 其ナ ろく〳〵考きん 実
ヨウ 左様して お異のうへ あるべきひ子エ 〳〵ナニ 仕儀ふるつて
和男ふ だうう〳〵て 居られ 出ませルト 立ようり しが 〳〵
其いさんの 出ふ 演けら見て お主の 処へ 伺の 所とろく 言ます
けすトりへバ お縁ハ 少し 考へて ろく〳〵 伺サ 金麦屋といふと
だが子ト言折ようふ 陸子を 伺て 入来る 者へ 関女の お豊

「ヨヤ姉上さん今日はお花さんいエ「ヨヤ」お客さう人御知へ
おまゑ　お家　長さんと同伴ひて　金麦屋の家を子　案
内ておあげトいはまてお客いい家内を着ろふ乱人無傷
の件ものまべ　「ヨヤ」お花さんの病気が多分悪ひの人
トあれもお家と同じ気の伝実ものの由来　知ちふ　長さん
風情をなるとも　涙を浮めて　親ゑ　「アレサ　法名を
不為とも　早く　箕さんの処へ　知らせふ　行のゴヨ　長助さんを
連ていらておいヨ　「アイ　あまてさものざねへトいひなら出

かけ　長助ふ　伴われ　急ぎ　用意て　おいけり
駕て　おまへ　長助を　連て　乗を　ひそき　急て　ありしうる
れ　ゆく　金麦屋の家の　際まで　ひそう　長助ふ　案
内　それより　おまへ　帰り　行　長助へ　金麦屋の家ふ
入り　主人ふ　対面して　解出　そ　おも　ひきへ　彼　お花を
駕籠へ　連て　ゆく　箕　長ふ　急れざる　時へ　糸　ふ　ふて
自害　ものも　及ぶべ　ものとふ　思ひ　迫られ　うれべさ　ゲ
ものも　捨　命　ぐらく　主人を　知りるぐう　後の　歌も　悔も


お豊が実意
日毎よ
お花の
許へきます

[illegible]第八不忠とゐれば止まるを正路に成度と人に[illegible]の
[illegible]をいこしてやるこゝろ 前後のをを委敷ものがたり
さて高野より下向の後[illegible]知くせぐるはさす
がに出家別家へも[illegible]のなれば其者の使出
[illegible]と財産きせんと斗る中に大病となり家早者命
らるべき様なるもあらん統に其今八先き様よりは[illegible]
是非なく儀に[illegible]あれまてハ[illegible]隠し[illegible]
ども死去 なごの[illegible]なる故[illegible]

[illegible]屋 [illegible]とぞんじ第上いとゝ[illegible]を相
[illegible]と第[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]又情[illegible]仕りふ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]時八[illegible]の[illegible]
[illegible]と相[illegible]

中上まで仰率扇屋に出良弟と共に出生の
別宅の妻なれば せめて赤飯に箕吉さまを
成まで 極よ出勢ひ中上まで 任憲早脇後の
お金でい 出産屋まで ひと云放しる 義助が 座
あつげる 義手に 親つけられ るのくるぶ 義悪の論
を捨て 簡略に みくね 福浦一堂の 熱本家 三二流の
お見のうるれば 如氏第に あるくそまつのるくね
赤に金 多の主人も 怒れて 早速 箕吉 紙の夫

より 海外 義助に 射西 させ 義助の 言る 勢を 樹
せるくく 箕吉に 言度せ
金帰 仰ふ 箕さんい 早く 叶人と 同伴ふ ようろ
ろふ 文度を 仕成ろ ひくト 言 義吉 箕吉も 大きに おそろき
家を 云 智文度を ある トキニ モシ 赤さんの 身が
病死さ 第三人 第多 雨露町 一堂が 病て 捐後の上で
始 まを みるければ 不後 妻ろ 妻乳で 屋で 異な 世人
やしく 大きに 苦労で ぎろに 俳大変な ところ

ありくに主税お理賀へ不知今夕雨霧町へ引くるお花
さんが京都を家出しことゆふ変ふ対て お茂宮中左家
が知れと思くへ命がるらふと兵衛門こたゑーとゆふ
中ふ箕吉へ支度篠夜ふそくて喜助ふ体へき路
を急ぎて お留の家ふ手付へ内へ流人熱歎の愛
法ふ会伴をいとて急れふ唱ゆるを来かる二人へ関
付て物ふギツクリ喜助へ血突てよろめきるゆく喜助モシ
若盗賊モウ御切まてと思へれきるへとを人を大ものの
ゆくゆ力と落して傷も抜けちる人ゆきり屋敷義べ箕吉
ふ伺根ふ乗ふ和孔の如くゆくふ
喜助を引きて お留の家ふ案内させ二人へ内ふ入るゆく
喜へ お孫さん モウ乃ふ合ゆくゆりまーくゆト 関て家へ
波を振向き眼ふ涙の露をうるめるゆく ヨヤ箕さん
久モウ遅へ社庭まるへふ コレ此覧成ヨモウ此根ふ
成て お侍様 社成ますこヨ 私へモウ 義兵そふでく 倶ふ
死度ございまれト 波左ゆて伏沈む 箕吉も涙を

るまして　其門はまで来ると会佛の教ゞ因えと
ろハツト思ひ〻ぶ宅早叶程ふるんこのうト云義ふのふ
泣ぶぐらゝお花の家の側ふ来り〻ぶ居る様子をかゞ
ふ長吉の孫拵て歯を食ひ合ぶる男泣者助ハ這来るぶ
声ハ工ヘマア情るひ姿ふるりて泣ひまし〻ナ〻甘て孔明
西ハ変て泣ひ能ふア引ーエ〻〻ふ〻ぶ助ゝ命ふ
代ハ知を尽ーとるも水の泡ふるりまし〻文絶意ーひと
思ーるこ若旦那を お連中ハ家門ふのふ世宅生て

お主成成ませねとハ言ふ若旦那ふお豆成成度だけ
ゝで京の出居ふ行ぶ産てい義ゝも知ゝれ海山ふ成て
遥〻ぶ玉の旅列ねお豆の痛〻ぶも辛理意ゞ世ゝ
途中の怖ひ災難を凌ぐも殺度仇板せゝと知ぶ
程ま〻ふ〻ふ花の東の町ふ来て西ゆも若旦那ふお豆
ふ成る変の〻ふ早ーゝと脱ひの甲斐るひ命の出運の果
ハ程ふ変ゝゝ糸勿ふ亜ゆ〻ぶ捨ぢゆものいとーいと
思ひ付と忠義い却て義助ゞ不忠の罪ぢぶ〻ぶ

ト悔ミ歎けば箕吉も涙を懷中の銀紙辛苦とおりひ
やうさえいろ〳〵涙ハ拭ひて言葉も正出お孫い孫更
お花のかをを身ハ引寄べて哀れ孫只泣伏て正体なく
おそくも涙を拭ひ立ち上り老さんお孫を金子その家へ
お連やて私ハ計宅へ帰りて直ちに死ぬべき〳〵ものを思ひ
箕さんのおかげモウ一度早ひと逢てこのかさぞお花さんハ
ゆを殘してゆく死ぬ〳〵と思ひと出〳〵ものを思ひ
宅ハ うらひそふごまへトされも涙ハ泣伏ける

第十八章

初て箕吉夫婦あハ お花の臨終ハ不意然傷ハ
ハ参そべき振もなし〳〵お孫その外の人〳〵も只涙ハ
途方に暮ひ居る処へ箕吉を通り居るハ福澤の別
家なる金子屋真三郎といふ者ハ〳〵お花の一件を聞
助ハ関て大きハ驚き箕助をお花の辯へ通ハして法也
ハ福沢屋寿三郎の海へ出て お花のもと委細ハ必
ければ寿三郎ハ深く驚ハ箕吉ハ一ハ簡略ハ

本家の血統のお花の身の上も朱支死人話のごとく
少し京紙の店にもお花を女と偽り輝く表裏相ろれ
ども流源の辺に隠居して世を送れしる伯父出坊が関付
られ再度家法をも赤さんと言へるハ推量ゆも
知れる事なり其者との密通ハ知れるとも記されるを
怪ミ扱ハ先祖へ対しても相済ぎ伯父の浮世坊の立場
用心とあるべきされバとて其者との情合あるゆえと一門
中の批判も迷惑なれバ番支真多藤ハ形ばかり仕るとの
吉人ゆえ内済よ及び其を義て真多藤お明の許へ
参りしが赤ハ花ハ流れて元人秋傷の宅中ありければ
人々ハ嫌合して見お花の記憶を福沢の別荘へ移し彼
処ハ初めて芸妓をさらへんと其者外の者を同ハ
財産て済く福沢屋の別荘へと送り扨
○ひらゆ其者の歌き表紙の精力藤ーお嫁おを
手外の実家の恋歌さそうと表へ着宅の
きんとて編る本なれバ思うーき事幸の

医人ハ人ノ生命ヲあつかふのこころなり
夫人有此身必有所感傷於内外而不能安其性只所
其特者医而已但今親兄弟あるとも医師ハ不為病人
の親母しく思ひ命を仕まつる医師より外ニ一人命を
新まるく医業の人深志の御あるくあれを活業として民
業を賣あるざしく美礼の多寡たるり論じ病ハ
治せども命の知い情合ハ比べきなくいかゞ病人命
なけれバ則病の余ることふ おゝぢ但一百年も存生名れ

殺ことる者ハ善を為人ハ毒病ひの苦痛を除れさせさて者
死しくて病ハ治せも寿を延命ことるハ
世事病人とおもくと調合製しそれの毒とも不思自分
者婆扁鵲の再来ともいふ拙ある面ろこそ笑けれと
言ものく病人のむげけ不宜医師の教をちらぶしそれ又
寿命の働て治難き病と不治病病とゞあれバ百年存命ある
ハ然れ死をとも医師の出ことるも言ゞけれと仮拙ある業ゞ
事裏おくて命年ハ業しむ病人ぶ左もまるる正名病文盲の

春水の常住男女のこゝ再説おもへば遥〻と栗のちゐあるりね
へ死者さへ義理も不和して銀銀辛苦を積うさねそれぞ為
の原とうり今見い墓ゐき人さしもあるべき果の義ともも
最惜きゆも捨方へ浮〻遥る福沢の利益を一筋の思ひ
出ゐと箕吉に附添せ通家の学〻悔ゐ新ゐさるる退
若の義悲とい以ど存生て去ぬる第ゐ安見もし見せも
乃ちうべ哀落ゐ死ぬるゐどうへゐるべうゐと猿面一ゐる之の
年ゐつきれ義仇の魂まうり御縁い孫更涙もろく一きりゐ

ゐ嫌び入り二言目ゐ今一度良吹ゐさせ箕吉ゐせあそ
一日ゆうくと遊せもゐうべ黄泉と申ゐ人ゐ陸ゐも敵い
きんと同じ言ゐゐも義度ういゐゐ回婆文ゐき変ゐべう
ろ「子丑箕さん仇称もモウ穢生とゐゐ振ゐるゐゐ年ゐ
ゐ子箕「左振サ逃も利ゐ叶ゐひどゐゐョウく
主振ゐ迷ひと言ゐひで後生ゐゐ無ゐ船ひをして学ゐる
方ゐ能ゐう左振男ひ歳トいゐいゐ人ども仇ゐゐ民一ゐ
の問義もゐさで別ゐく出しさゐ万一と学ゐ金ゐゐべし

憂とゝふ集ひて
嬉しき再會の
いとゝちかう

おかぢの縁ふ法をかれば彼業次郎も吉原ようお花魁助ち
吉原形ると云ふ〜信実者西系今日もお縁貧者と供ふ
此席ふ連り弟子を世話役とう働き致ふ入りてハ
同じく番頭を向通夜として元人をも殿ふ居こう
あが栄〜イエモシ貧さん私も同様ふ お縁さんの会話ふ
吉文を言ふ似る 振ぶが 義生とふるが 昔ふう 幾人もおこう
出花さんぶとりても まぶく 財制が 延ふひうう 生ふ入る
まひとも言れ言ぜ 何でも上ふる 医師さふが 来て何振ふ

あるうべス出るぶとふと思ひ 子 「ア 私も左様思
つて居るシブ子 何卒 国ふ医師ふあれい 銀子ふ 貧ぶ何振
ちて 変が出来るものふ 実甲斐ふ 変ふ
名人の医師が来ても 治方ふ多ひのチ 栄〜ナニそれでも 貧ぶ
ぶ日も十日もふて上ふ医師が 横生と人がありまふ
此ふ甲斐の 使本とふ 医師の 偽を 関ふ 実ふ
事ふ上ふる人で 家産 ま〜くこそ〜て 自分の 金ふ
ふで 治ふひ 変ふ 他を 助力させて 藤治をして 病人を 板

たとへば腎臓おぼうるまさがり汁源ゑんぞとりふるものを上るはは
ゑると仮処り汁の寄処は依て元ぐ者が藤生産元ある
と言ぎ沢ぐろ〳〵ヨキ〳〵左板の手エそれじやり おゑ さん
汁飯して上ってらべ仮板ぐちろ 重ぎ 藤乳の中ハ一変も
汁医師ゑ変ゑ来んぐゑハゑろ仮事 汁をして上変と
思ひ出ぎハ 栄〳〵イヤ汁とのべ考助 さんが 腎り 乳ゑ経で
痛が痛 ひとのハくら 先刻 按摩を 仮で藤源して 黄
ゑ 居ゑ 仮板 仕〳〵 ホンニ 左板ぐちつけ 藤

治をして居ぎぐらふが上るる杉人 栄〳〵左板サ お医師
さるが不動合故肉〳〵 按摩 汁をして 出仮 風仮ぐ
却て新鮮人ハ上るがあるるものサ ろ〳〵ヨキそれぢやア お花
さんを着て黄所て 汁をして 黄所ぐちつ仮板ぐちつ 子エ
無〳〵ヨキ九い考血を変ぐ仮板して 宝早 業師業が
お出 成て 藤生 精がるるものトハ 折ハ 次のる
ろ 考助ハ 考出 考〳〵ヤ〳〵 大きハ 流人 考〳〵 考乳ぐ
きぐ〳〵 考〳〵イヤ 痛ハ 治きろ 考人 考〳〵 汁源のお 考で

ぶくぶくと沸くが如く、ぶくぶくと窒が如く功者の針医さんと思はれまして
お孫さんも御元が病ひと称して止て来
まして療治を御頼み成ませんうく〳〵や左様久と
ばやア私ようお花さんが針を仕て貰ひたいの
何と御願ます呆ナニサ度さん先刻うお孫さんが
為癒を言ひしてお花さん針でも折うべ又験をうるも
あるごらふと言のごいナ成程夫も成るまして
ばざるまじアア参ひしてもお方の会釈しまら針を

釈めまうう其ハエそればうてもう良ばうくうりてモウ半月
まあ釈ものラ水の様な膿へ針を折て是
ものもれまれまひサ呆ナラ〳〵それハ療治代を出して釈
のごうう死人でも何でも厭ひハ仕ましう為成療
治が利とハ何釈も其ハイヤ為成ア所月迄ばて
ばうで来ず死切りても釈の沖迎も参盃らしらるば
レサアア私の預ひばうう何辛針を釈んでお呉社成ヨ
まる釈ず参ばばと治まうて見水左様

あて行くまゝトお孫が言を信用ふ者も忠義の
ものゝ為ゝ爲ゝ今一度と思ひ思と知りながら
彼行医を産業の拵ぎ主張を委しく述べしこのみ
けれバいやゝハイ実ゝ私ハ京都うゝ医師紙修行の為ふ
七年ほど以来ゝ書生を修巡りまして七年二年
だゝう修りして居まして丈うゝ肥後の平戸へ参つて
居まゝ第漂流されて来ると異国の医師ふ始める修
技を習まゝ御ぶ御ぶ来一度もその療治を

旅ゝ支ぶ御ぶ申せんうゝ一ゝ模生ぶ知るとハ
申されませんぶ申ぶ病人の出容体を例ひませうゝ
答ゝ一ゝ二ゝ三ゝ宅早病人でゝ申ひうゝ変とゝふの申
いやゝ一ゝ二ゝ三ゝ義ハ昨今義和いゝして居まゝ又義で
絶切て冷水ツゝ人間の骸へ汁を形むとゝふ人もゝ
左様ゝ支ゝを言れも仕ませぬうゝ彼模生仕法の汁
流り御ゝ旅ゝさるぶひとゝのでゝ御ぶ申ぬ「アヤ
マア何でも御うゝ早ゝ療治をゝて上て貰ゝお願ふ

ト雖ども又療治可為看度とふ
医師あれば万一と思ふ所より亂人倶に一致して医師を
お花の死骸の側へ伺ひ看度とうけ
○必竟医師の功あるや亡人蘇生の色限い如何ぞ
又次の巻に委しくあるも。

秋色艶麗 處女七種三編 下之巻了

太真遺傳
上處女香
精製桐の箱入
一朱

とゝく 世間に美人の誉高くして
しかるに其の美人の中に男女不淫の人あり
あるゝ世間の美世間に多く白粉流行
世間とゝく新の美人の
世分も白粉流行と
なりかへるとこそ

賣弘所

先自然と桜のごとく有の二品を用ひなば紛れぬ義無の執用も羽二重縮のごとく手ざはりよきものとなる也。是を用ひて後よき衣の艶おしむ時は[illegible]くなると請合也。能記て[illegible]洗ひその香[illegible]通る也。白粉と付ける時は[illegible]自然と[illegible]の如くなる[illegible]不及年[illegible]羽[illegible]も用ひ[illegible]美くなる[illegible]用ひなば真の美人となりたまふべし

為永春水精製

髪の艶を出し
髪癖をなほす

妙薬 初みどり

このくすりは髪を洗ふおりに[illegible]

書物并繪入讀本所

江戸京橋弥左衛門町東側中程

文永堂 大嶋屋傳右衛門